

【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

（例）隅田川すみだがわ

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）放水路開鑿かいさく

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数）

（例）「# 言+闌」、第4水準2-88-83」

隅田川すみだがわの兩岸は、千住せんじゅから永代えいたいの橋畔きょうはんに至るまで、今はいずこも散策の興を催すには適しなくなった。やむことをえず、わたくしはこれに代るところを荒川あらかわ放水路の堤つつみに求めて、折々杖を曳くのである。

荒川放水路は明治四十三年の八月、都下に未曾有の水害があったため、初めて計画せられたものである。しかしその工事がいつ頃起され、またいつ頃終ったか、わたくしはこれを詳つまひらにしない。

大正三年秋の彼岸ひがんに、わたくしは久しく廢よしていた六阿弥陀詣ろくあみだもうでを試みたことがあった。わたくしは千住の大橋をわたり、西北に連る長堤を行

くこと二里あまり、南足立郡沼田村にある六阿弥陀第二番の恵明寺えみょうじに至ろうとする途中、休茶屋やすみぢやの老婆が来年は春になっても荒川の桜はもう見られませんかよと言つて、悵然たつぜんとして人に語つて聞いているのを聞いた。

わたくしはこれに因よつて、初めて放水路開鑿かいさくの大工事が、既に荒川の上流において着手せられていることを知つたのである。そしてその年を最後にして、再び彼岸になつても六阿弥陀に詣よでることを止めた。わたくしは江戸時代から幾年となく、多くの人々の歩み馴れた田舎道の新しく改修せられる有様を見たくなかつたのみならず、古い寺までが、事によると他処よそに移されはしまいかと思つたからである。それに加えて、わたくしは俄にわかに腸を病み、曠昔きやうせきのごとく散行の興を恣ほしにするのできない身となつた。またかつて吟行の伴侶であつた親友某君が突然病んで死んだ。それらのために、わたくしは今年昭和十一年の春、たまたま放水路に架せられた江北橋かうほくばしを渡るその日まで、指を屈すると実に二十有二年、一たびも曾遊そうゆうの地を訪おもつ機会がなかつた。

\*

大正九年の秋であつた。一日深川の高橋から行徳ぎやうとくへ通う小さな汚のりい乗合あひのモーター船に乗つて、浦安うらやすの海村に遊んだことがある。小舷こへりを打つ水の音が俄に耳立ち、船もまた動揺し出したので、船窓から外を見たが、窓際の席には人がいるのみならず、その硝子板ガラスいたは汚れきつて磨硝子すりのように曇くもっている。わたくしは立つて出入でいりの戸口へ顔を出した。

船はいつか小名木川おなぎがわの堀割を出いで、渺茫びやうぼうたる大河の上に泛うかんでいる。対岸は土地がいかにも低いらしく、生茂おいしげる蘆あしより外には、樹木も屋根も電柱も見えない。此方こなたの岸から水の真中へかけて、草も木もない黄色の

禿山が、曇った空に聳えて眺望を遮っている。今まで荷船の輻湊した狭い堀割の光景に馴らされていた眼には、突然濁った黄いろの河水が、岸の見えない低地の蘆をしたしつつ、満々として四方にひろがっているのを見ると、どうやら水害の惨状を望むが如く、俄に荒涼の気味が身に迫るのを覚えた。わたくしは東京の附近にこんな人跡の絶えた処があるのかと怪しみながら、乗合いの蜆売に問うてここに始めて放水路の水が中川の旧流を合せ、近く海に入ることを読き聞かされた。しかしその時は船堀や葛西村の長橋もまだ目にとまらなかった。

わたくしの頹廢した健康と、日々の雑務とは、その後十余年、重ねてこの水郷に遊ぶことを妨げていたが、昭和改元の後、五年の冬さえまた早く尽きようとするころであつた。或日、深川の町はずれを処定めず、やがて扇橋のあたりから釜屋堀の岸づたいに歩みを運ぶ中、わたくしはふと路傍の朽廢した小祠の前に一片の断碑を見た。碑には女木塚として、その下に、

「#ここから3字下げ」

秋に添て行ばや末は小松川

芭蕉翁

「#ここで字下げ終わり」

と刻してあつた。わたくしはこれを読むと共に、俄にその言うがごとく、秋のながれに添うて小松川まで歩いて見ようと思ひ、堀割の岸づたいに、道の行くがまま歩みつづけると、忽ち崩れかかった倉庫の立並ぶ空地の一隅に、中川大橋となした木の橋のかかっているのに出会つた。

わたくしは小名木川の堀割が中川らしい河の流れに合するのを知つたが、それと共に、対岸には高い堤防が立っていて、城塞のような石造の水門が築かれ、その扉はいかにも堅固な鉄板を以って造られ、太い鎖の垂れ下つているのを見た。乗合の汽船と、荷船や釣舟は皆この水門をく

ぐつて堤の外に出て行く。わたくしは十余年前に浦安に赴く途上、初めて放水路をわたった時の荒涼たる風景を憶い浮べ、その眺望の全く一変したのに驚いて、再び眼を見張った。

堤防には船堀橋という長い橋がかけられている。その長さは永代橋の二倍ぐらいあるように思われる。橋は対岸の堤に達して、ここにまた船堀小橋という橋につづき、更に向の堤に達している。長い橋の中ほどに立って眺望を恣にする<sup>ほしこま</sup>ると、対岸にも同じような水門があつて、その重い扉を支える石造の塔が、折から立籠める夕霽<sup>ゆうせ</sup>の空にさびしく聳<sup>そび</sup>えている。その形と蘆荻<sup>ろてき</sup>の茂りとは、偶然わたくしの眼には仏蘭西の南部を流れるロオン河の急流に、古代の水道<sup>アクワデク</sup>の断礎の立っている風景を憶い起させた。来路<sup>らいろ</sup>を顧ると、大島町<sup>おおじままち</sup>から砂町<sup>すなまち</sup>へつづく工場の建物と、人家の屋根とは、堤防と夕霽とに隠され、唯林立する煙突ばかりが、瓦斯<sup>ガス</sup>タンクと共に、今しも燦爛<sup>さんらん</sup>として燃え立つ夕陽の空高く、怪異なる暮雲を背景にして、見渡す薄暮の全景に悲壯の気味を帯びさせている。夕陽は堤防の上下一面の枯草や枯蘆の深みへ差込み、いささかなる溜水<sup>たまりみず</sup>の所在<sup>ありか</sup>をも明<sup>あきらか</sup>に照し出すのみか、橋をわたる車と人と欄干の影とを、橋板の面に描き出す。風は沈静して、高い枯草の間から小禽<sup>ことり</sup>の群が鋭い声を放ちながら、礫<sup>つぶて</sup>を打つようにぱつと散つては消える。曳舟の機械の響が兩岸に反響しながら、次第に遠くなって行く。

わたくしは年もまさに尽きようとする十二月の薄暮。さながら晩秋に異らぬ烈しい夕霽<sup>ゆうせ</sup>の空の下、一望際限なく、唯黄いろく枯れ果てた草と蘆とのひろがり<sup>ひろがり</sup>を眺めていると、何か知ら異様な感覚の刺戟を受け、一步一步夜の進み来るにもかかわらず、堤の上を歩みつづけた。そして遙<sup>かわしも</sup>か河下の彼方に、葛西橋の燈影のちらつくの<sup>を</sup>認めて、更にまた歩みつづけた。

葛西橋は荒川放水路に架せられた長橋の中で、その最も海に近く、その最も南の端れにあるものである。

しかしそれを知ったのは、家に帰って燈下に地図をひらき見てから後のこと。その夕、船堀橋から堤づたいに、葛西橋の灯を望んだ際には、橋の名も知らず、またそこから僅四、五町にして放水路の堤防が、靴の先のような形をなして海の中に没していることなどは、勿論知るはずがなかった。

夜は忽ち暗黒の中に眺望を遮るのみか、橋際に立てた揭示板の文字さえ顔を近づけねば読まれぬほどにしていた。揭示は通行の妨害になるから橋の上で釣をすることを禁ずるというのである。しかしわたくしは橋の欄干に身を倚せ、見えぬながらも水の流れを見ようとした時、風というよりも頬に触れる空気の動揺と、磯臭い匂と、また前方には一点の燈影も見えない事、それらによつて、陸地は近くに尽きて海になっているらしい事を感じたのである。

探険の興は勃然として湧起つてきたが、工場地の常として暗夜に起る不慮の禍を思い、わたくしは他日を期して、その夜は空しく帰路を求めて、城東電車の境川停留場に辿りついた。

葛西橋の欄干には昭和三年一月竣工としてある。もしこれより以前に橋がなかったとすれば、兩岸の風景は今日よりも更に一層寂寥であつたに相違ない。

晴れた日に砂町の岸から向を望むと、蒹葭茫茫たる浮洲が、鰐の尾のように長く水の上に横たわり、それを隔ててなお遙に、一列の老松が、

いずれもその幹と茂りとを同じように一方に傾けている。蘆荻ろてきと松の並木との間には海水が深く侵入していると見えて、漁船の帆が蘆あしの彼方かなたに動いて行く。かくの如き好景は三、四十年前までは、浅草橋場の岸あたりでも常に能く眺められたものであろう。

わたくしは或日蔵書を整理しながら、露伴先生の『「#」言+闌』、第4水準2-88-83「言らんげん」中に収められた釣魚ちつぎょの紀行をよみ、また三島政行ゆきの『葛西志』を繕といた。これによって、わたくしはむかし小名木川の一支流が砂村を横断して、中川の下流に合していた事を知った。この支流は初め隠坊堀おんぼうほりとよばれ、下流に至って境川、また砂村川と称せられたことをも知り得た。露伴先生の紀行によると、明治三十年頃、境川の兩岸には樹木が鬱蒼として繁茂していた事が思い知られるのであるが、今日そのあたりには埋立地に雑草のはびこる外ほか、一叢ひとむらの灌莽かんもうもない。境川は既に埋められてその跡は乗合自動車の往復する広い道になっている。昭和五年、わたくしが初めて葛西橋のほとりに杖を曳いた時、堤の下には枯蓮の残った水田や、葱ねぎを植えた畠や、草の生えた空地の間に釣舟屋が散在しているばかりであったが、その後散歩することに、貸家らしい人家が建てられ、風呂屋の烟突が立ち、橋だもとははテント張りの休茶屋みぢやが出来、堤防の傾斜面にはいつも紙屑や新聞紙が捨ててあるようになった。乗合自動車は境川の停留場から葛西橋をわたって、一方は江戸川堤、一方は浦安の方へ往復するようになった。そして車の中には桜と汐干狩しおひがりの時節には、弁当付往復賃銭の割引広告が貼り出される。

\*

放水路の眺望が限りもなくわたくしを喜ばせるのは、蘆荻ろてきと雑草と空

との外、何物をも見ぬことである。殆ど人に逢わぬことである。平素市中の百貨店や停車場などで、疲れもせず我先きにと先を争っている喧騒な優越人種に逢わぬことである。夏になると、水泳場また貸ポート屋が建てられる処もあるが、しかしそれは橋のかかっているあたりに限られ、橋に遠い堤防には祭日の午後といえども、滅多に散歩の人影なく、唯名も知れぬ野禽の声を聞くばかりである。

堤防は四ツ木の辺から下流になると、兩岸に各一条、中間にまた一条、合せて三条ある。わたくしはいつもこの中間の堤防を歩く。

中間の堤防はその左右ともに水が流れていて、遠く兩岸の町や工場もかくれて見え、橋の影も日の暮れかかるころには朦朧とした水蒸気に包まれてしまうので、ここに杖を曳く時、わたくしは見る見る薄く消えて行く自分の影を見、一步一步風に吹き消される自分の跫音を聞くばかり。いかにも世の中から捨てられた成れの果だというような心持になる。

四、五年来、わたくしが郊外を散行するのは、かつて『日和下駄』の一書を著した時のように、市街河川の美観を論述するのでもなく、また寺社墳墓を尋ねるためでもない。自分から造出す果敢い空想に身を打沈めたいためである。平生胸底に往来している感想に能く調和する風景を求めて、瞬間の慰藉にしたいためである。その何が故に、また何がためであるかは、問詰められても答えたくない。唯おりおり寂寞を追求して止まない一種の慾情を禁じ得ないのだというより外はない。

この目的のためには市中において放水路の無人境ほど適当した処はない。絶間なき秩父おろしに草も木も一方に傾き倒れている戸田橋の兩岸の如きは、放水路の風景の中その最荒涼たるものであろう。

戸田橋から水流に従って北方の堤を行くと、一、二里にして新荒川橋に達する。堤の下の河原に朱塗の寺院が鬱然たる松林の間に、青い銅瓦

の屋根を聳かしている。この処は、北は川口町、南は赤羽の町が近いので、橋上には自転車と自動車の往復が烈しく、わたくしの散策には適していない。放水路の水と荒川の本流とは新荒川橋下の水門を境にして、各堤防を異にし、あるいは遠くなりあるいは近くなりして共に東に向って流れ、江北橋の南に至って再び接近している。

堤の南は尾久から田端につづく陋巷であるが、北岸の堤に沿うては隣畝と水田が残っていて、茅葺の農家や、生垣のうつくしい古寺が、竹藪や雑木林の間に散在している。梅や桃の花がいかにも田舎らしい趣を失わず、能くあたりの風景に調和して見えるのはこのあたりである。小笹に蔽われた道端に、幹の裂けた桜の老樹が二、三株ずつ離れ離れに立っている。わたくしが或日偶然六阿弥陀詣の旧道の一部に行当って、たしかにそれと心付いたのは、この枯れかかった桜の樹齡を考えた後、静に曾遊の記憶を呼返した故であった。

江北橋の北詰には川口と北千住の間を往復する乗合自動車と、また西新井の大師と王子の間を往復する乗合自動車とが互に行き交っている。六阿弥陀と大師堂へ行く道しるべの古い石が残っている。葎篋張りの休茶屋もある。千住へ行く乗合自動車は北側の堤防の二段になった下なる道を走って行く。道は時々低く堤を下って、用水の流に沿い、また農家の垣外を過ぎて旧道に合している。ところどころ桜の若木が植え付けられている。やがて西新井橋に近づくに従って、旧道は再び放水路堤防の道と合し、橋際に至って全くその所在を失ってしまう。

西新井橋の人通りは早くも千住大橋の雑沓を予想させる。放水路の流れはこの橋の南で、荒川の本流と相接した後、忽ち方向を異にし、少しく北の方にまがり、千住新橋の下から東南に転じて堀切橋に出る。橋の欄干に昭和六年九月としてあるので、それより以前には橋がなかったの



であろうか。あるいは掛替えられたのであろうか。ここに水門が築かれて、放水路の水は、短い堀割によって隅田川に通じている。

わたくしはこの堀割が綾瀬川あやせがわの名残りではないかと思っている。堀切橋の東岸には菖蒲園しょうぶえんの広告が立っているからである。下流には近く四木よつぎの橋が見え、荷車や自動車の往復は橋ごとに烈しくなる。四木橋からその下流にかけられた小松川橋に至る間に、中川の旧流が二分せられ、その一は放水路に入り、更に西岸の堤防から外に出ているが、その一は堤を異にして放水路と並行して南下しているのに出逢う。

市川の町へ行く汽車の鉄橋を越すと、小松川の橋は目の前に横たわっている。小松川の橋に来て、その欄干よに倚ると、船堀の橋と行徳川の水門の塔が見える。この水門の景は既にこれをしるした。水門から最終の葛西橋までその距離は一里を越えてはいないであろう。

「#地から2字上げ」昭和十一年四月

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。